

源賴家
源實朝

鎌倉三代記 八ッ目

一四

三浦別れの段

〔解題〕 安永十（天明元）年三月廿七日から江戸豊竹肥前座初演。作者未詳。紀海苔の「鎌倉三代記」（享保三年）とは別物、内容上「近江源氏先陣館」（淨瑠璃名作集、下巻所收）の續篇とも見られる作柄で、大阪の夏の陣を材題として、世界を鎌倉に取つて趣向を立て、坂本城を大阪城に、石山の陣を茶臼山の本陣に、また鎌倉を江戸に當て、人物としても、北條時政は徳川家康、源賴家は豊臣秀頼、佐々木高綱は眞田幸村、三浦之助義村は木村重成、時姫は千姫をモデルとしたものと取れる。

本曲は十段に分れて居るが、時政の女でしかも坂本城の勇士三浦之助と許嫁の間柄である時姫を戀と孝との間に挟まれて苦悶する悲劇の主人公として居る點に特色を發揮して居り、こゝに收めた七段目切の三浦別れの段が山である。而してこの段に身代りに殺した藤三郎となつて時政を欺いて居る佐々木高綱が現れて、時姫と共に堅い決心を以て北條時政の許に入込んで、時機を窺つて鐵砲で討取らうとしたが、運勢強き時政を又も討損じた。そして賴家は蝦夷へ渡り、時姫は自害し、高綱は出家するに終つてゐる。

三重（いりかさ）入相（いりあひ）過ぎ。地（ち）されば風雅（ふうが）の歌人（うたひと） 一文字（いちもんじ）に取つてかへす。心（こころ）は更に後（おしろ）れ 轉（くる）ぶ物音（ものおと）は。地（ち）胸（むね）にこたゆる二世（にせい）の縁（ゆかり）は。戀（こひ）とや聞（きこ）かん虫（むし）の音（おと）も。木（き）下（した）澤（さわ）の ねど若（わか）し落（お）人（ひと）と人（ひと）や三浦（さんぷ）が孝行（かうぎょう）の。念（ねん）心（しん）時姫（ときひめ）走り出（で）で。見（み）紛（ま）ふ方（かた）なき武者（むしゃ）ぶ蛙（かえる）の聲（こゑ）々々（々々）。地（ち）修羅（しゆら）の巷（がやう）の戦（いくさ）ひと。身（み）力（りき）通（と）す母（はは）の軒（のき） 嬉（うれ）しや笑（わら）ふと氣（き）の張（は）弓（きう）。りの。ヤア三浦（さんぷ）様（さま）かと駈（か）寄（よ）つて。抱（か）起（おこ）に引（ひ）締（しめ）むる兎（うさぎ）の緒（おと）。若（わか）宮（みや）口の戦（いくさ）場（ば）より 初（はじ）めてがつくり門口（かどぐち）に。フシ（ふし）かつばと さん（さん）も大男（おおおとこ）。詞（こと）コレ時姫（ときひめ）でござんす。

地といへども正氣あら悲しや。詮方な
の力。藥の驗は目のあたり。今お前の
身となり幼少の。三浦を育て暮す内。
く間も有合はす幸ひ氣附けの獨參湯。
お氣の付いたも。扱は。母に與ふる藥
宇治様よりたつての御所望。頼家公の
注ぎかけたる藥水の。一滴五臟に。フシ
で。精氣涼しくなつたるも。思はず知
近習となし。今より二代の忠臣との。
泌渡り。地むつくと起きて。詞母人は
らず親の御慈悲。ハア勿體なし勿體
お詞が有難さに。坂本の城中へ。御奉
いづくに。オ、お氣が付いたか懐かし
なし。お休みならば。お寝顔なりと拜
公に參らす時。わらはも共にとありつ
やと。地鐵にひしと。フシ縫りつく。詞
まんと。長母も我が身もこれぞ此の
れども。イヤ。悴三浦は人に勝れ
ム思ひ寄らぬ時姫殿。爰へはどうして
一世の別れと思ふにぞ。さすがの勇氣
て。孝行深き者なれば。母が傍に附添
地問ふ間も惜しや母人に。對面せんと
も恩愛の肉身。分けし。フシはら。と。
は。まさかの時に親に引かれ。未
行くを引留め。詞時姫殿とは聞えませぬ。
地先立つ涙案内にて。物音響かば驚き
練の心付く時は。却つて親子が弓矢
ぬ。何ぼお嫌ひなされても。私はお前
給はん。靜かに。と。フシ心鎮めて
の名折れと。此のまゝ故郷に引残り。
の女房ぢや。夫の代りに母様の。介抱
病所の口。地立寄れば母の聲。詞嫁女
別るゝ時もくれんと。詞必ず。
に來たが何の不思議。ム。すりや此
嫁女。オ、嬉しやお目が覺めましたか。
親ありと思ふなよ。母が事は忘れても。
の程より附添ひ居るか。シテ。母人の
三浦様がお歸りぞや。義村參上仕る。
お主に忠義を忘るゝな。煩ふとも死ぬ
御機嫌は。今すやくと御寝なつて。
地アと明ける隔てをはたと閉しヤレ此
るとも。知らせもせぬぞ便りもすなど。
お食はどうぢや。アイ。何差上げても
の障子明けまい。詞そも三浦が歸
言聞かした教訓を。よもや忘れう様が
いやとおつしやる。今朝はやうく。粥
りしとは。坂本の城へ歸りしか。よも
ない。それにうか。戻つて來る三浦
の湯を少しばかり。ハア聞きしに違は
爰へ來る三浦ではあるまい。必ず鹿相
ではない。ソリヤ人違ひ。もし又來た
す。それでは御本復覺束ない。サア。さ
な事いふまいぞ。コレ嫁女よう聞きや。
が定なれば。京鎌倉。兩家分目の大事
れどもお氣の御實正なは。獨參とやら
夫平六兵衛殿は先君の後家人。後家の
の軍。戰場に向ひながら。さす敵に後

を見せる。狼狽^{ろうた}た性根ならば。子ではの道を忘れし不調法^{ふてうはふ}。御病氣のお氣を僞り。お前は今宵討死に。行かしやんないぞ。親でない。母は病ひに臥しな探ます。不孝を御免下されかし。追口に手を覆へどとまらぬ涙聲イヤから。日毎に人の取沙汰を。餘の名は付け凱陣仕らん。その時目出たく御對死の門出には忍びの緒を切ると聞く。聞かず我が子はいかに。三浦は手柄し面お暇申すと立出づる。時姫あわて抱たるかと。佛神に祈誓をかけ。おのれきとめ。なう待つて下さんせ。詞折角殊更兜に名香の香るは豫ての御物語。やれ早う死んで。未來の夫に我が子の顔見た甲斐もなう。もう別るゝとは曲思ひ切つた最後のお覺悟。私もお前にし。その未練な悴が有様。何と夫にもない。親に背いてこがれた殿御。夫留めやせぬなせ。あからさまに打明け話されう。最早この世で。顔合はす子婦の固めない内は。モどうやらつんとて。此の世の縁は是限り未來で夫婦に持たぬぞ。この蚊帳の内は母が城廓。心が濟まぬ。短い夏の一夜さに。その後れた魂で。この城一重破らるゝ忠義の缺くる事もあるまい。サハリ是程なつてやろと。一言いうては下さんせならサ破つて見よ。地と百筋千筋の理までに附墓ふ私が心。思ひ。やつてくぬ。やつぱり敵の娘ぢやと疑うてかいを籠めて引つかついでる蚊帳の内泣くれもせで。ナホス心強やと緋緋に。裏紫の聞えませぬ。父上の事は打忘れ日本音。フシより外いらへなし。母の教の色フシ深き。調オ、切なる心は祭し國に親といふは。奥にござる母様より訓肝に銘じ。調其のお詞忘れねばこそ。たれども。出陣は延ばされず。夫婦と外にはないと思うて居るに。餘り氣強故郷を出でて今日まで。一度便りも致なるは凱陣の後。暫しの間と相待たれい三浦様。お前を先立て跡にのめくさねども。お命も危しとの。噂を聞くよ。イエくそれでも。ハテ聞分けなし生きて居る時姫ぢやと。思うてかいのに胸迫り。今生で御無事なお顔を。た放されよ。と堀振切りく駈出すを。と身を震はし。積りくて憂さつらつた一日拜みたさに。眠くらんで。侍又抱止めて三浦様。調追付け凱陣とはさ。鎧の膝に夕立のフシ涙波み出す如

くなり。調オ、よい推量。いか程親切を盡しても。三浦が疑ひは晴れぬわい。アノ又私に疑ひが。オ、晴れぬ仔細いひ聞かせん。ガそれも益なし。もうさらば。イ、エ待たしやんせ。イヤサ放せ。イヤなうコレ。長うとめはせぬわいなう。どの様に思うても。アノお婆返す事藤三めに仰付けられたれど。心元なく横日の使。時政公の御指圖かねて覺えし忍びの術。小松道より半丁ばかり此井筒まで切抜かせ。忍び入つたる術の手つがひ。三浦が爰に來りしは。弱網で鯨の大功。御身たちは宿はづれの。出口々々に番を付け。姫の安否を相待たれよ。ナホス。合點々々と點頭き合ふ後に立聞く隣のおくる。人こそ來たれ何者と。咎むる内にも。フシ透さぬ身構へ。調ア、聊爾なされなお味方の者。ム、味方とは傍輩の女中か。御末か。名は何と。イヤ。私は今日の役目忍びの自ラオクリ短夜フシ既に更け渡るを蒙むる。安達藤三が女房。夫に力を。フシ丑三つ告ぐる。夜風の闇を窺ひ立戻付けん爲。疾くより爰へ忍びの女。勝手覺えし裏口四方。御案内申しましよホ、ハ、ハ、ハ、出かしたく。最究竟。コレ。局。我に任して斯う。ナ

地今宵一夜は夜伽遊ばし。同じ事なら御臨終の跡で。死んで下さんせと。スエカ、リ言ふも泣く。義村も。父母に受けたる身體髪膚。死日に逢はで別るゝかと。行きつ戻りつとつ置いつ。又もや咳の聲すれば。是こそ聲の聞納めと。思へば弱る後髪。せめて暫しは餘所ながら。萬分一の恩報じ。御樂なりと溫めんと。心の内にくる珠數の涙。か。名は何と。イヤ。私は今日の役目ア、イヤ。申し。そりやお前悪い思

ひ付きぢやぞえ。鎌倉方の御評定には。ぞ。エ、イ。扱はお前は。首のない男ば。それこそ誠の親の慈悲。恨めしい坂本の城は追付け落ちる。お前的大切が好きぢやな。いかに下が肝心ぢやと父上様。明日を限りの夫の命。疑はれに思はしやます三浦殿は。今日明日の内に首がころり。その手筈ぢやんとしもあるげな。何ば可愛がらしやつても。首のない男に心中立てるは。跡の月の富の札を買ふ様なものぢやぞえ。そんな危いものより。男に持つて。マ何不足ない藤三郎。タマ時姫を取返して戻つたらば。其の褒美にばし汝が女房に遣はす間。心の儘に楽しむべし。ナホスとの御上意。父御にきつと約束して来たからは。殿御といふはコレこの藤三。サハリお前への心中に。顔に入黒子して来たわいな。詞イヤ又美しい物でもある。地いやでも應でもかたがて退く。サア、サ、ハ、ハ。フシお出でと付き纏ふ。詞寄るな、推参者。主人に對して慮外の科。時姫が手討にする一緒に自害せいとおつしやつて下さら

も立てず。隠せし刃にわつとばかり、モ胸慫な御心底。地御免々々と言はせ人。あの世の縁を三浦様。必ずやいのとばかりにて。既に自害と三浦之助。頭抱へて逃げて行く。時姫せき來しつかと押さへヤレ早まるまい。詞只今の一言にて。日頃の疑ひ晴れたるぞ。スリヤ眞實親達も。夫には見かへぬな。ホウ神妙々々。コレ時姫。今死ぬる命を永らへ。三浦が最後を見届けた上。母様を殺して歸れとある難題は。刃の色に顯はれて。胸を切裂く御賜物。夫の敵討つ氣はないか。ム、敵を討て尤も親の許さぬ夫。思ひ初めた不義のとは。そりや誰を。オ、外までもなし。科。お憎しみあるならばお手討に遊ばきは理り。誠三浦が女房ならば。夫がすとも。恨みとは存じませぬ。夫を捨て頼む一大事サ違背はあらじ。去年來佐々木高綱。時節を考へ付狙へども。上へ恥を見せしめとは。餘りむごい御中々討つ事能はざる武運強き北條殿。仕置。とても繋がる縁ぢやもの。夫と佐々木が力に叶はねば。この討手は日に對して慮外の科。時姫が手討にする一緒に自害せいとおつしやつて下さら本に。御身ならで外になし。迎ひの來

るは究竟の時姫。招きに應じて立歸り。と、言捨てゝ。行くを透さず三浦之助。に不便の最期。地女が心思ひやる。父に近附き油斷を見て一刀。直ぐに其の太刀わが咽に刺し貫いて自害せば。これ親を討つにあらず。時あつて親子主従刺遠ゆるも武門の道。頼みといふは一つ。得心なれば未來はおろか。五百生まで誠の夫婦。いやなれば此の座ぎり。親に付くか。夫に付くか。落付く道はたつた二つ。サア返答いかに。思案いかにと、地せりかけられ。どちらが重い輕いとも恩と戀との義理詰めに。詞は涙諸共に。詞思ひ切つて討ちませう。北條時政討つて見せう。父様赦して下さりませとわつと叫べば。眞中にどつかと坐し。詞時姫の不審尤才出かされたり天晴れ。地と天にも上る。フシ勇みの顔色。地思ひがけなきしは。面體我に見紛ふばかり。似たる小陰より窺ふおくるつと出で。詞聞を幸ひ。價をくれて命を買取り。去年。郎に相違あらじと。コレ。この面に入人なしと思ふは不覺。最前よりの一石山の陣にて北條家を欺きし。佐々木墨を。さゝれし時の其の嬉しさ。この大事残らず聞いた時姫殿。覺悟召されが贅首こそかの藤三郎。ア、僅かの恩印ある時は白晝に往來するとも。佐々

木と咎むる地者もなし。我が命だにあ一生の本望と。にこ／＼笑うて逝かれ早く／＼。イヤナウ佐々木殿。若宮口の合戦。事急に及び。必死の戦場。斬下^{した}に翻さんと心の笑み。調折ふし姫を顔を見るにつけ。思出されて懐しう。ご迎ひの使者。言付けられしはハア是幸ざりますると言ひさしてひれ伏す疊のシヤ此の謀の成就^{しゅじゆ}を。見届けずしてひ。百萬の大軍より討取りがたき一人目に涙。人の歎きも身にこたへ何れを死ぬるは不忠。一つには母に今一度。を。討つ謀は姫にあり。地と密かに三見ても義理故に。死なねばならぬ定りか。聞く御運が定ならば討死を思ひ留^{とど}替^かの鎧。故郷に歸る心の錦とは知らず浦へ内通し。謀合せし計略はづれす。つてたべ三浦様と。口説き歎けば愚かして敵方に。後を見せしと嘲られん事。姫の心底極まる上は。大願成就時來れり。ハ、ハ、ハ、ハア、嬉し／＼。調生は難く死は易し。生残つて末代までの武門の疵。ヘエ、思へば悦ばしと。勇める面色威あつて猛く。大事を計るは。佐々木殿程の。器量な無念口惜し。此の上の願ひには是よげに名にし負ふ坂本のフシ總大將と類くては思ひもよらず。三浦などが及ぶり又も若宮の森に向ひ。一身五體すだひなき。地おくるも末座に顔を上げ。べきか。一旦思ひ極めし討死。再び返／＼になる迄斬つて斬り死。調謀の先調私が夫は水呑み百姓。かつ／＼の生さぬ姿を見よ。と地明くる鎧の引合せ途を見ず。相果つるも武士の意地。眞業さへ。長の病氣の貧苦の内。不相應肌着は染まる紅に。雪を隠取る數ヶ所平御免下さるべしと地思ひ込んだる。な御恩のお貢。金銀に命は賣らねど。夫の氣は付きながら弓矢の家に生れしはら／＼涙。調オ、ウ尤も至極高綱も。も元は侍の端くれ。生れ付いて臆病で。身が。是程の手を負ひ給ふと知らぬ女今少し。この謀早かりせば。あつたら弓引く事も叶はぬ非力。我が身を悔むの淺ましさと。縋るを拂ひコレ／＼お勇士をやみ／＼と。討死はさせまいも似たが仕合せで。討死の數に入るはくる。調奥へ參つて母人の。介抱頼むの地残念さよさりながら犬死とばし思

はれた。京都武士に時政の眞實面體 縁の鉢石心の目當。突出す鎧を障子
見覚えしは御邊一人。三浦が首を討取 越し。しつかと取つてオ、念力見えた。
つて實檢に入れるならば。いよ／＼我 詞まつ此の通り仕畢せよ。地フシと脇壺
に心を許し。近寄る術の一つとならん。ぐつと貫いたり。地ナウ母様勿體なや。
地時は御邊の首をもつて。敵の大將 コハ何故と三浦が驚き。おくるも周章
討取らば最期の大功忠義の第一。我は て立ちつ居つ。血止めよ氣附けと、フシ
もとより敵に入り。心は佐々木。面は 立騒ぐ。詞ア、何驚くことがある。定
此のまゝ藤三郎。三浦が首は。安達藤 業極まつた死病。人參の精力で。死兼
三が討取るぞ。ハ、ア／＼忝し悦 ぬる此の母が。苦痛を助ける止めの鎧。
ばしや。最期の本望この上なし。冥途 女でこそあれ侍の母。疊の上の病死せ
で再會々々。地互ににつこと顔見合 うより。我が子と共に。討死と思へば。
せ。笑ふぞ武士の。フシ涙なる。地此の切先は名醫の鎧。詞ナウ嫁女。
の中に時姫は心を定めオツオそれよ。是が勿體なうては。仕畢せる事心許な
親を捨て命を捨て。主に従ふは弓取 い。産みの親御を振捨て。何の恩も
りの道。夫に従ふは女の操。不孝の罰 ない姑を。誠の母と此の程の。起伏し
の當らば當れ。夫故には幾奈落の。責 介抱心遣ひ。親切とも過分とも。どう
苦を受くとも厭ふまじ。父の陣所に立 も禮の言ひ様がなさ。こなたに功が立
歸り。仕畢せお目にかけう。ガ一念 てさしたさ。三浦が母を仕止めたれば。
通るか通らぬか。女の切先試みんと。産みの父北條殿へ。孝行の一つは立つ。けて男泣き。敵の娘と思し召し。御憎

しみも引替へて重ねゝの御慈悲心。

怪しや。東國の軍勢。坂本の城間近く

じ。後詰の副將城中より加勢を乞はんは如何に。コハ。佐々木殿とも覺

御恩をいかで忘るべきせめて半年添ひもせで。思へば短い親子の縁。

陣の用意あれと言渡し。庭の井筒をしつかと踏まへ。古木の松ケ枝廳の。

えぬ一言。必死と定まる三浦之助。かほどの手疵をなに屈託。オ、萬夫不當

最期所は變るとも。我が子も嫁も。

クリ木傳ふ。へ如く駈上り。ハア、寄せ

の大ナホス丈夫。地早や打立たんと高綱

は一緒に死出の縁。詞蓮の臺で祝言の。

たり。東は志賀越え平崎口。伊

が。フシ勵ます勇聲せき立つ若武者。

酌人は此の母。嫁入りの興を。未來で

達の一黨奥州勢。勢田ヶ崎まで満ち

切る振袖。合是なう今が御臨終。名殘

付き跡から参ります。地と三人顔を見

旗眞先に坂本さしてひた寄せに。北は

縁の切目は蘭奢の香り。臨無常の聲や。

合せて一度にわつと。叫び泣き。フシ是

丹波路龜山街道。西は京道淀八幡。皆

人ならぬフシ所もなし。同日本一度に

ぞ。此の世の名残なる。地佐々木も悲

寄するとも恐るゝ敵は只一人。勝負の

行く

歎にくれ居しが。四方をきつと打眺め。

間既に四更も過ぎたれば。東の陽氣は

一舉は望にあり。ヤア。三浦。たと

これ鶏鳴。南北西に人氣立つは。ハレ

へ心は剛なるとも。深手に弱り働き得

部之節夫太義